

黄金の紙びよう一つ

高齢の八鹿はるさん（大分市）の歌集『母子草』を読む。

人手借りず我に為しうることは幾つか動けずなりてしみじみ思う

寝たきり十年余、九十歳のはるさんは自力でなしうる事が幾つ残っているか、数えてみて驚いた。幾つもないのだ。ああ、老いとは何もかも失われていくことだ。高僧良寛は「かにかくにすべなきものは老いにぞありける」と詠んでいる。せんすべもなければ、苛いらだ立ちは渦巻き、不安はわきやまない。老いとはそういうもの。しかし、はるさんは歌う。

菜種梅雨なたねづゆ今日は冷ゆると持ち来てくれし熱きコーヒーに嫁とくつろぐ

コーヒーの香りと共に 姑しゅうとめと嫁よめが融とけあっている。老女は老いを受容し嫁またそれを支持している。はるさんは続けて詠んでいる。

雑炊ぞくみの薬味やくみに入れたるにら苺いちご匂におふ嫁の作りし箱植えの苺

軒下のひよろひよろ苺も光彩を放ち、嫁のすることすべてが輝いてくるのである。

しかし、姑と嫁、しかも病親となると、始めからこうとはならず、ふつう葛藤は重く永くのたうつものである。寝ついて四年めの歌がある。

みどり児の如く柔らかしと洗ひくるる四年間踏みしことなき踵かかと

私はこの一首に想像する。この嫁にしても四年たったころ、やっと姑の踵を幼児のそれのごとくに愛惜あいせきするに至りえたのではないだろうか。『母子草』に嫁なる久美子さんは遠慮がちに一首を添えている。

幼児の如く甘ゆる老い姑にその母の如くに振るまふ吾か

ある詩人は歴史創造を殿堂の構築にたとえた。殿堂の一角に八鹿さん母子は黄金の鉾を打ちつけているといえよう。

(一九八四年一月十四日)